



長崎県立  
奈留高校

小中高一貫教育

# 「小さな島の大きな挑戦」 12年一貫の校種を超えた 教育で生きる力を育む

◎1965年、長崎県立五島高校の分校として開校。76年に独立。校訓は、自主自律、積極実践、知性錬磨。98年に文部省「中高一貫教育実践研究」の委嘱を受け、中高一貫教育を開始する。2006年、教育特区に認定。08年には長崎県の指定を受け小中高一貫教育を始める。軟式野球部が国体に出場するなど、部活動も盛ん。

<b>設立</b>	1965(昭和40)年
<b>形態</b>	全日制／普通科／共学
<b>生徒数</b>	1年生16人、2年生8人、3年生17人
<b>2014年度入試合格実績(現役のみ)</b>	国公立大は、長崎大、琉球大、長崎県立大に6人が合格。私立大は、福岡工業大、福岡女学院看護大に2人が合格。準大学は、水産大学校に1人が合格。短大1人、国家公務員1人、就職5人。
<b>住所</b>	〒853-2201 長崎県五島市奈留町浦1246-2
<b>電話</b>	0959-64-2210
<b>Web Site</b>	<a href="http://www.news.ed.jp/naru-h/">http://www.news.ed.jp/naru-h/</a>

変革のステップ

背景

◎児童・生徒の減少に伴い、多様な進路を描けるように小中高で連携し切磋琢磨する環境を整える必要性が浮上。小中高一貫教育を開始

実践

◎SPP(\*)や講演会などで、多様な進路の方向性を生徒に感じさせる。小・中学生にそうした高校生姿を見せ、早期から進路意識を涵養

成果

◎生徒の視野が広がりつつあり、国立大への進学率も向上。小中高の教師の意識が統一され、協力体制も整う

STEP 1

STEP 2

STEP 3

固定化した狭い環境で  
子どもたちをどう大きく育てるか

長崎県の五島列島に位置する人口約25000人の奈留島。長崎県立奈留高校は、島唯一の高校だ。過疎化が進み、子どもの数も年々減少している奈留島では、小・中学校も1校ずつしかない。そうした状況にあって、2006年度、教育特区の認定を受け、島の3つの学校は小中高一貫教育に取り組んでいる。キャッチフレーズは「小さな島の大きな挑戦」だ。下釜祐保校長はこう語る。

「地域の過疎化が進んでいるからこそ、人づくりが重要だと考えています。『奈留の子どもは奈留で育てて社会に送り出す』と、小中高の全教師が同じ気持ちで、学校種を超えて力を合わせ、教育活動を行っています」

現在の児童・生徒数は、小学生44人、中学生38人、高校生41人。島外の高校に進学する生徒は少なく、子どもたちは幼少期からほぼ同じ仲間と過ごす。そうした環境の強みと弱みを、生徒指導主事の本田総一郎先生はこう話す。

「島の子どもたちは素直で純朴です。校外で会っても、元気に話し掛けてきます。半面、もまれる経験がありませんので、競争意識が低く、卒業後、社会に出た時に自分らしさを発揮して生きていけるかが心配です。皆、幼少期から一緒に育っているのです。学習や運動

\* SPP = Science Partnership Program (サイエンス・パートナーシップ・プログラム) は、独立行政法人科学技術振興機構による、科学技術、理科、数学に関する観察、実験、実習等の体験的・問題解決的な学習活動の支援事業

における序列を崩すのは難しいようで、自分を高める目標をなかなか設定できない点も課題だと感じています」

離島という環境では、子どもにとつて生き方のモデルとなる大人も少ない。生徒や保護者が多様な将来を描けるような進路指導の必要性を、教師たちは感じていた。



長崎県立奈留高校校長  
**下釜祐保** しもがま・さちほ

教職歴30年。同校に赴任して2年目。「自分の足で立ち、頭で考え、手を使って、人生を組み立てられる生徒を育てる」



長崎県立奈留高校  
**本田総一郎** ほんだ・そういちろう

教職歴14年。同校に赴任して6年目。生徒指導主事。「生徒と共に悩み、考え、達成感を味わうために、何事にも全力投球する」



長崎県立奈留高校  
**小佐々慎也** こさぎ・しんや

教職歴8年。同校に赴任して5年目。進路指導主事。「高校という青春の最高のステージでキラキラと輝く生徒を育てたい」



長崎県立奈留高校  
**山内 徹** やまうち・とある

教職歴7年。同校に赴任して4年目。教務主任。「目標を見据え、その達成に向けて努力の出来る、熱い思いを持った生徒を育てたい」



長崎県立奈留高校  
**濱砂菜美子** はますな・なみこ

教職歴7年。同校に赴任して5年目。進路指導部3学年担任。「まずは自分自身が知的好奇心の塊となり、学ぶ楽しさを体現したい」

## 小中の職員室を訪れ 日常的な交流で思いを1つに

小・中学校と高校の校舎は隣接しており、互いに行き来しやすいため、小中高合同の活動をあらゆる場面でやっている(図)。

乗り入れ授業は、特定の教師が他校種の学校で、単独で授業を行うか、またはチーム・ティーチング(TT)となる。以前、中学3年生の国語の授業を担当した濱砂菜美子先生は次のように話す。

「中学校の学習指導要領を読んではいまいたが、実際に教えてみて、発達段階にかかわらず指導し続けるべきこと、中学校での既習事項だから高校では更に上のレベルを教えなければならぬことなどのすみ分けが、よく分かりました」

また、研修の1つとして、小中高の各教師は公開授業を年1回行い、特別に用のない限り、原則参観する。1教科の担当者数が少ないため、研修の機会を出来るだけ増やすことと、他校種の子どもの様子を把握することが目的だ。理科担当で教務主任の山内徹先生は、小学校の授業を見て大きな刺激を受けたと話す。

「小学生がどんどん拳手をし、積極的に授業に向かっている姿勢を見て、高校でも生徒の知的好奇心をもっと引き出す授業をしなければと痛感させられました」

### 図 小中高が連携した主な活動内容

- **乗り入れ授業**  
高校→中学校…理科、家庭科、保健体育、英語(ALT)  
高校→小学校…英語(ALT)  
中学校→高校…数学、保健体育、音楽  
中学校→小学校…英語、音楽  
小学校→中学校…保健体育
  - **合同行事**  
歓迎遠足(4月)、体育大会(9月)、百人一首大会(11月)、センター試験壮行会(1月)、全国大会出場時の壮行会・応援、町内イルミネーションの飾り付けボランティアなど
  - **小中高合同職員会議(月1回)**
  - **研究組織の統一**  
各教科部会(国語、算数・数学、英語、奈留・実践など)、各領域部会(三大行事、調査広報、健康など)、キャリア教育部会(2013年発足)
- \*学校資料から抜粋して編集部で作成

学校行事では、「三大行事」の歓迎遠足、体育大会、百人一首大会が、小中高合同の大きな行事となる。児童会や生徒会が主体となって計画・運営し、体育大会では練習も校種を交えて行う。更に、保護者や地域の人々も支援・参加する地域の一大イベントになっている。

このような合同の活動やイベントの準備をスムーズに行えるよう、時程を調整している。授業時間の違い(小学校45分間、中学校・高校50分間)を考慮し、授業開始時刻を8時半に統一するなど、日課を設定した。また、小中高合同の職員会議を月1回実施して情報交換や活動の検討を行い、各教科部会、三大行事部会、キャリア教育部会などで、それぞれ研究を進めている。当初は、学校目標が校種によって異なることや発達段階の違いもあり、連携は困難だと感じ

ることがあった。しかし、活動を進めるうちに、小中高の教師たちの交流は深まり、12年間で子どもを育てるといふ雰囲気生まれていった。

本田先生は、担当の保健体育で中学1〜3年生の授業にITで入り、また、体育大会の指導で小学5・6年生にも接する。会議がなくても小・中学校の職員室に行き、打ち合わせをすることが多い。そうした日常的な交流を積み重ねたことで、人間関係が築かれていったと話す。

「小・中学校の職員室に行くと、必ず児童生徒の話になります。生徒が高校ではどんな様子かと小・中学校の先生も気になります。そうした何気ない会話を積み重ねることで、どんどん垣根が低くなっていくのを感じます」

## 支援事業を利用して島外に出て、進路の選択肢を広げる

小中高一貫教育で、最も力を入れていることの1つがキャリア教育だ。13年度にキャリア教育部会を立ち上げ、小中高の全教師でキャリア教育研修会とワークショップ(WS)を開いた。

WSでは、3校種の教師が必ず入るように6つのグループに分け、一貫教育のグランドデザイン(3つの柱である「人間力・社会力の向上」「学力の向上」「進路力の向上」)について、KJ法を用いて考えを整理した。その結果、キャリア教育の重点指導項目として、「自己肯定感の

醸成」「コミュニケーション能力の向上」「協力・協働する力の向上」が共通認識としてまとめられた。WSの企画者の1人、進路指導主事の小佐々慎也先生は次のように話す。

「WS形式の研修は初めてでしたが、先生方それぞれの熱い思いが表れて、予想以上に議論は白熱しました。終了後の感想では、小中高で意見交換が出来て良かったと、多くの先生方に言っていた。WSの目的だった『子どもの18歳での姿を共有する』だけでなく、もう1つの狙いの『本音を互いに言い合える関係をつくる』も達成できたと思います」

高校のキャリア教育では、1年生で多様な進路の選択肢を見せる活動を重視する。同校では、2年生から「大学進学」と「専門学校・就職」の志望別のクラスに分かれるためだ。小佐々先生は次のように説明する。

「2つのクラスでは授業内容が大きく変わるため、1年生の間に進路について十分に考えさせる必要があります。進路講演会などの行事は生徒の視野を広げられるような内容とし、1年生は全員参加としています」

大きな活動は、県の支援事業でもある、1年生でのインターンシップだ。県内の保育園や市役所、ホテルなど、本人が希望する職種に合った事業所に、夏休みの3日間、就労体験をする。夏休み明けには、参加者全員の体験発表会を開き、自分が体験していない業種についても知る



写真 長崎大での特別講義の様子。准教授から、石炭・石油などによる火力発電、原子力発電、水力発電、風力発電など、各々の長所や短所を学んだ。「それぞれの特性を生かした、エネルギーのベストミックスという考え方が重要だ」という説明に、生徒は自分なりの考えを深めていった

機会を設けている。

もう1つ、生徒が将来を考える機会となるのは、サイエンス・パートナーシップ・プログラム(SPP)での活動だ。14年度に「自然エネルギー実用化への着眼点」のテーマで採択された。奈留島近海にある浮体式洋上風力発電施設を題材に、自然エネルギーについて研究する。8月、1・2年生の希望者と3年生の大学進学希望者が長崎大を訪れ、環境科学部の准教授からエネルギーに関する講義を受けた(写真)。2週間後、生徒は准教授と風力発電施設を見学し、風力発電について学んだ上で、生徒一人ひとりが日本の電力供給についての考えを発表した。山内先生は活動を通じて生徒の変化を感じた。

「ある生徒は『エネルギーについて漠然としか考えていなかったけれど、自分の考えを持てるようになった』と言っていました。特

に理科が得意な生徒ではないので驚きました。ただ知識を吸収するのではなく、自分なりに考えを深められた結果だと思えます。科学技術振興機構の『サイエンスキャンプ』に自ら参加希望を出した生徒や、環境に関する学部について調べる生徒も出てきました」

長崎大での講義の後には、奈留高校OBの長崎大生の案内でキャンパスを見て回った。交通機関の制約があり、オープンキャンパスへの参加もままならない生徒たちに、大学を直接見る機会としてほしいという狙いもあった。

高校の進路講演会には中学生も参加する。センター試験時には、会場がある隣の島に向かう3年生を、小中高の児童・生徒・教職員全員で激励し見送る。更に、3年生の卒業時に開かれる合格体験発表会には、中学1〜3年生も参加し、先輩が自分の進路を決めた過程を聞く。このように、高校入学以前から将来を考えると共に、先輩のたくましい姿に憧れを抱くような機会を設けている。

しかし、何よりも生徒のモデルとなる存在として教師の役割は大きいと、瀧砂先生は話す。

「生徒数が少なく、一人ひとりに時間が掛けられる分、生徒も教師をしっかり見えています。生徒と接する機会の多い教師が誰よりも憧れる対象となり、生徒に刺激を与え続けなければなりません。そのために、私自身、もっと外に出て勉強したいと思います」

## 生徒に「本物の力」を付け 社会に送り出していく

様々な制約や壁を乗り越えながら、小中高一貫教育を進めている奈留高校。生徒の視野は確実に広がり、進学率も上昇。国立大の合格率は、小中高一貫教育を始めた時は5%だったが、14年度入試では19%となった。

今後の課題は、生徒の潜在能力をいかにして引き出し、将来の可能性を広げていくかだ。実際、中学校時代から高い学力を持ちながら専門学校の志望していた生徒に、入学時から大学の学びの面白さなどを伝え、多様な進路があることを見せていった。その結果、大学進学を志

望するようになり、見事、志望校に合格したという。

教師は、小・中学校時代から児童・生徒一人ひとりをよく見ている。そのため、高校入学直後から各自に適した指導を行うことが出来る。そうした利点を生かし、生徒に「本物の力」を育てていきたいと、下釜校長は語る。

「本校の先生方は、1日・1時間を無駄にしまいと、目の前の生徒たちのために全力で教育活動に取り組んでいます。ただ、小中高12年間の教育を考えると、誰かが少し遠くの将来まで俯瞰的に見ることも必要です。その舵取りをするのが、『人づくり』を担う校長の務めだと思っています」

## 情熱 若手教師が語る、指導変革への

### 生徒の100%の力を 引き出せる教師を目指して

教務主任 山内 徹

正直に言って、赴任前は小中高一貫教育でどのようなことをしているのかイメージが湧きませんでしたし、赴任当初は小中の先生方と話をしても垣根のようなものを感じました。しかし、合同行事や乗り入れ授業などで話し合いを何度も繰り返すうちに、子どもへの熱い思いは同じなんだと感じるようになりました。小中にはベテランの先生方が多く、普段の話でも公開授業でも学ぶことが多くあり、そうした面でも小規模校が校種を超えて連携する意味は大きいと思います。

奈留高校での勤務も4年目を迎え、生徒の良い面と同時に、競争心に欠けるという課題も見えてきました。私は、生徒に少しでも“競争意識”を与えられるような指導を心掛けています。定期考査や模試、部活動などにおいて、達成可能な具体的数値目標を設定し、その目標を徹底して植え付けることで、目標達成のためには何が必要で、どのようにすべきか、その解決策を自身で考えられるようになります。そして、その目標を達成した時に、達成感や学ぶ楽しさを味わい、それが新たな目標を生むことにつながると考えています。競争相手が周りにいない生徒たちだからこそ、教師が目標を設定してやることも重要だと思うのです。

生徒と教師の両者が、いかなる時も100%の力を出して物事に打ち込むことで、十分な成果が得られると考えます。これからも、様々な工夫をして、生徒と共に成長の過程を歩んでいきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2012年8月号指導変革の軌跡「長野県飯山北高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け